

Contents

- 貸出冊数3倍増の秘密
— 着実な発展を続ける松山大学図書館 — …… P2
- 資料検索〈英米文学・英語学系編〉 …… P4
- 私が薦めるこの一冊 …… P6
- 新稀覯書紹介〈その5〉 …… P7
- 統計データで見る松山大学図書館 …… P8

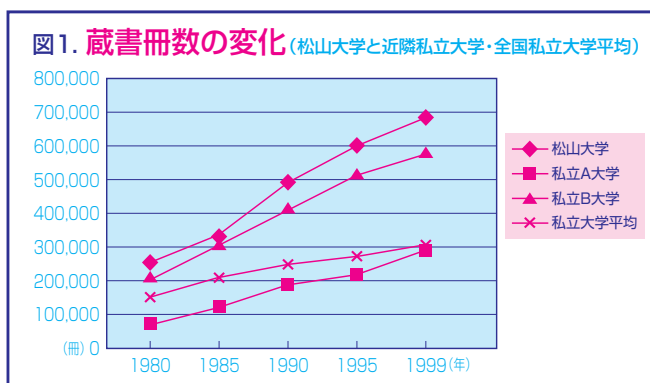


貸出冊数3倍増の秘密 — 着実な発展を続ける松山大学図書館 —

人文学部助教授(図書館運営委員) 大内 裕和

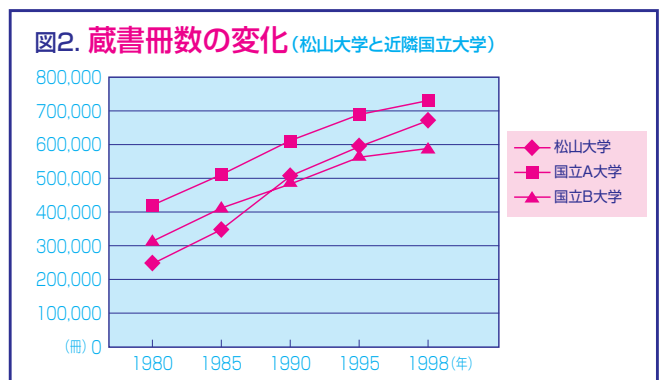
大学において最も重要な施設の一つが図書館である。松山大学図書館は旧松山高等商業学校図書課を母体とし、1949年大学図書館となって現在に至っている。このように伝統ある図書館であると同時に、近年の発展には著しいものがある。私自身も4年前この大学に勤務を始めた頃、その充実ぶりには驚かされた。ここでは1980年代以降から現在までの松山大学図書館の発展の軌跡をたどってみよう。

第一に挙げられるのが、蔵書冊数の増加である。1980年、松山大学図書館は約26万冊の蔵書があり、全国の国立大学の平均52万冊には及ばないものの、公立大学の平均17万冊、私立大学の平均16万冊を上回る冊数をすでに保有していた。このように蔵書冊数においてすでに優れていた松山大学図書館であるが、1980年以降さらに充実が進められた。特に1994年に開始され、1996年に完成した図書館の増築(開架・閉架合わせて約100万冊の所蔵が可能)が、その大きな基盤となった。その結果についてはまず図1を見てもらいたい。ここには松山大学図書館と中・四国のほぼ同規模の私立大学図書館との蔵書冊数の変化を比較してある。この20年間の松山大学図書館の充実ぶりがよくわかるだろう。現在、松山大学図書館は中・四国の私立大学図書館のなかで最大数の蔵書を保有している。また全国の私立大学図書館の平均を大幅に上回っていることもこの図から読み取ることができる。



また図2を見てみよう。ここでは松山大学図書館と近隣国立大学図書館との蔵書冊数の変化を比較している。比較した二つの国立大学に対して1980年の時点では及ばなかったが、1990年には国立B大学に追いつき、その後追い越していること、さらに1990年代後半にかけて国立A大学の蔵書冊数に接近していることがわかる。このことを裏付ける

データとして、1980年から1999年における国立大学図書館の蔵書冊数の増加平均が35.1万冊であるのに対して、松山大学図書館はそれを上回る42.6万冊の増加となっている。こうしたことから松山大学図書館が現在、近隣国立大学と匹敵する蔵書冊数を保有していること、そして特にこの20年間における蔵書の充実が国立大学の平均を上回っていることがわかる。



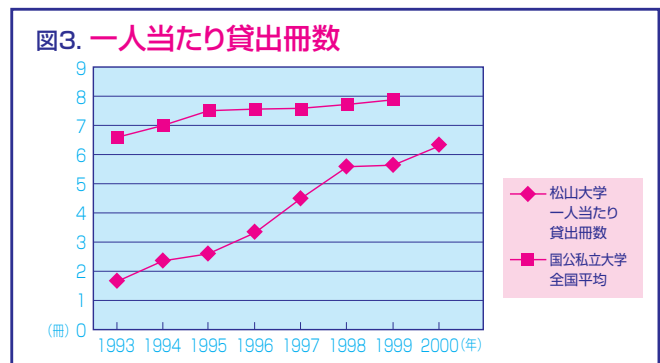
第二には、これまでの研究=教員のための図書館から教育=学生のための図書館としての充実である。1980年6月の図書館運営委員会において各学部学科ごとに基本的な文献を収集するという方針が決定された。そして1984年には基本図書予算として500万円が計上され、学生用図書を含む基本文献の収集が明確に制度化された。こうして蔵書の中身=質を研究のみでなく、研究・教育双方に役立つものへと転換する改革が実施されたのである。1996年の増築完成によって、開架スペースも拡大し、開架図書の増加に一層のはずみがついた。講義と図書館資料とのリンクを図るという試みも進んだ。1997年には各教員が推薦する指定図書コーナーが教員名順に変更され、学生が関心のある講義・教員を念頭において図書を探すことが容易になった。また1998年からは「講義案内」掲載図書が指定図書として配架されるようになった。実際その後、学生の指定図書コーナー利用は急速に増加している。さらに1999年には選書委員会が設置され、学生用の開架図書を専門的に整備する体制が強化された。このように1980年に始まり、1990年代に入って本格化した松山大学図書館における改革は、日本における大学図書館としては特に重要な意義も持っている。なぜなら日本の大学図書館はそれまで、研究者=教員のための図書を収集・保存するためのものという

性格を強くもっており、学生の学習をサポートするという点で大きな弱点を抱え込んでいたからである。それは大学が何よりも研究の場としてのみ捉えられ、学生の教育ということが二の次にされてきた歴史的事情とも深く関わっていたといえる。一連の改革は、こうした歴史的事情に伴う日本の大学図書館の弱点を積極的に改善する試みであったと見ることができる。

第三には、検索を含めた図書館業務の電算化の進展である。この点については1988年に図書館業務の電算化の基本構想がまとまり、1990年10月より開始された。これは図書館業務の効率化・省力化をもたらすこととなった。さらに重要なことは、このことによって図書館利用者へのサポート体制が充実したことである。特に1997年4月に公開され、1998年以降本格的に導入されたWeb OPACはそれまでの専用端末と比べて容易に図書を検索することを可能にし、利用者に大きく役立つこととなった。また1990年の電算化開始と同時に進められた図書の遡及入力も、1998年に体制を強化することによって順調に進み、2000年には和書・洋書ともに完了した。ここで松山大学図書館のすべての図書資料がコンピュータ検索可能となったのである。数量・質ともに豊かな蔵書を存分に利用する体制が整備されたといえる。

第四には、これらの図書館改革に伴って松山大学図書館における学生の図書利用が急速に増加していることである。これは1990年代に入ってから顕著にあらわれた。表1からわかるように、1993年における学生の総貸出冊数は1万1130冊であったのに対して、2000年度には3万8779冊に達しており、7年間で3倍以上貸出数が伸びているのである。図3のように、学生一人当たりの貸出数も1993年の1.84冊から2000年には6.16冊に伸びている。1999年度の全国大学図書館平均の7.93冊にはまだ及ばないが、これを急追しているといえるだろう。また表

1はこの貸出の中身をも示したものであるが、注目されるのは1996年以降閉架図書の貸出がほぼ横ばいになっているのに対して、指定図書の貸出が2000年には1996年の3倍以上に、そして開架図書の貸出冊数がほぼ2倍となり、1万冊以上伸びていることである。指定図書の貸出増から、講義と図書館利用がリンクしてきていることが読み取れ、開架図書の貸出冊数の伸びは、学生用図書の増大を目指してきた1980年以降の図書館改革が実を結んできていることを示している。



この20年間における松山大学図書館の絶えざる自己改革の歩みは、一世を風靡した学部名の変更や場当たりの入試改革といった表層的な大学改革と比較して、内容の伴った見識ある方向であったことは間違いないだろう。大学の研究・教育内容への関心の増大という時代の流れは、こうした図書館をもつ松山大学にとっては正当な評価を受けるチャンスと考えることができる。知や情報のセンターとして図書館がさらに発展することが、松山大学における研究・教育の充実にとって必要不可欠である。教員・職員・学生の皆さんには、この図書館のさらなる発展のために、積極的な利用と同時に、改善のための意見を寄せてほしい。そのことが松山大学図書館にとって、さらには大学教育全体にとって大きなプラスになると私は確信する。

表1. 貸出冊数

	1993年度	1994年度	1995年度	1996年度	1997年度	1998年度	1999年度	2000年度
開架	8,055	10,200	11,330	13,631	17,886	23,022	22,535	24,636
指定	1,963	2,485	2,706	3,048	4,336	7,052	7,824	9,278
閉架	1,112	1,862	3,100	4,147	5,491	5,455	4,776	4,865
合計	11,130	14,547	17,136	20,826	27,713	35,529	35,135	38,779
	対93年度比	130.7%	154.0%	187.1%	249.0%	319.2%	315.7%	348.4%

※数字は学部生のみ

資料検索<英米文学・英語学系編>

はじめに

今回は、英語英米文学科の学生諸君に特に有用と思われる資料検索の材料を紹介します。英語英米文学科では、「英語」をキーワードに、関係する諸々の専門分野を学ぶわけですが、紙幅の関係上、ジャンルを英米文学と英語学（および英語教育学）に絞って紹介したいと思います。

1. 英米文学、英語学を学ぶために

英米文学、英語学の何れ（あるいは英語教育学）を学ぶにせよ、第一にその分野の内容、目的、研究方法を知る必要があります。そのようなことについて初学者向きに書かれた便覧として、『**大学生の英語学習ハンドブック**』が研究社から出ています。英米文学、英語学を専門とするいわゆる英文科の学生に読者を限定した訳ではないようですが、英語英米文学科の学生にとっては活用したい一冊でしょう。同書には、専門分野の研究の仕方、レポート・論文（卒業論文）の書き方のほか、英語の各種資格試験、留学の心得、さらには卒業後の進路選択など、参考にしたい情報が多く含まれています。



「大学生の
 英語学習ハンドブック」
 研究社、1999年
 分類番号：830.7/K 76/1
 配架場所：開架(3階)ほか

まず、このようなハンドブックを手掛りに、学習を始めてみるのも良いかもしれません。同じく研究社から、『**英語青年**』というある程度専門的な、と言っても、一般読者も対象にした雑誌が刊行されています。多少、英米文学が主といった感もありますが、読むべき雑誌です。ほかに英語学関係では『**月刊言語**』（大修館）、英語教育関係では『**英語教育**』（大修館）、『**英語展望**』（英語教育協議会）などがあります。四誌とも、図書館一階雑誌コーナーで閲覧できますから、ぜひ目を通して見て下さい。



「英語展望」
(英語教育協議会)

「英語青年」
(研究社)

「英語教育」
(大修館)

「月刊言語」
(大修館)

2. 基本的な参考図書

次に、英米文学、英語学（および英語教育学）各分野の専門の学習に欠かせない、基本的な参考図書について。

〔英米文学〕

英米文学研究の領域は、従来は、一部の白人男性作家による、ごく限られたジャンルの作品のみが「正統派文学」と見做されていましたが、女性や非白人による作品や、いわゆる「純文学」以外のジャンルの作品も同等に評価しようという動きが活発化してきました。そこで、SF、ファンタジー、児童文学から映画、漫画といったサブカルチャーまでが研究対象として認められ、さらに女性文学、エスニック文学、ゲイ文学などといった観点からの枠組みができました。また、学問の領域の相互乗り入れが始まり、文学研究には歴史学や社会学など幅広い学問分野の知識や視点が欠かせなくなりました。従って、皆さんは柔軟な見方、多様な価値観を身につけ、古い文学史に載っていない作品にも興味をもって欲しいと思います。文学史や演習の授業で取り上げられ、興味を持った作家は、文献目録で調べて、基礎知識を押さえておいて下さい。下記書目は、榎木『**卒論を書こう**』三修社1995を参考にしていますが、同書にはこれらの図書についてそれぞれ簡単なコメントが添えられているので、そちらも参照して利用して下さい。



「18-19世紀英米文学
 ハンドブック」増補版
 朱牟田・長谷川・斎藤／編、南雲堂、
 1977年
 分類番号：930.36/J 3/1(2)
 配架場所：開架(1階)・
 参考図書コーナー

「20世紀英米文学
 ハンドブック」増補版
 上田・大橋・増田／編、南雲堂、
 1966年
 分類番号：930.36/N 15/1(2)
 配架場所：開架(1階)・
 参考図書コーナー

「20世紀イギリス文学作家総覧」
青山／編著，北星堂書店，
1977年
分類番号：930.2036/N 41/1~4
配架場所：開架(1階)・
参考図書コーナー

「20世紀イギリス文学研究必携」
虎岩・羽矢／編，中教出版，1985年

「アメリカ文学作家作品事典」
岩元・酒本／監修，本の友社，
1991年
分類番号：930.29033/A 139/1
配架場所：開架(1階)・
参考図書コーナー

「アメリカ文学研究資料事典」
常松・田中・コルプJr／編著，
南雲堂，1994年
分類番号：930.31/A 161/1
配架場所：開架(1階)・
参考図書コーナー

〔英語教育学〕

「英語教育現代キーワード事典」
安藤／編，増進堂，1991年
分類番号：830.7/E 79/1
配架場所：開架(1階)・
参考図書コーナー

「英語教育用語辞典」
白畑・富田・村野井・若林／編，
大修館，1999年
分類番号：375.8903/E 36/1
配架場所：開架(1階)・
参考図書コーナー



〔英語学〕

最近の英語学は、言語学、更には認知科学の目まぐるしい展開により(梶田・加藤編『海外言語学情報』第10号 大修館 2000など参照)、内容的に実に多彩な領域を含むようになってきました。加えて、英語だけ見ていては、人間言語の普遍的特徴だけでなく、英語の個別的特徴も十分理解できないことから、英語と日本語などとの対照研究も一層盛んになっています。このように、英語学には様々な可能性があり、どの領域を学ぶかは誰しも迷うところですが、取り敢えずは、英語学の中核部分(音韻、形態、統語、意味など)の基礎を押さえましょう。その上で、英語の言語現象を科学的に説明する作業に取り組んでいって欲しいと思います。英語学を実践するには、それなりに専門知識を仕入れることが必要ですが、以下のような(比較的最近刊行された)専門の辞典・事典を有効に利用すると良いでしょう。これらの辞典・事典には、数多くの基本的且つ重要な研究が引用され、それらは巻末の参考文献目録に連ねられています。

3. 文献を探す、集める

英米文学と英語学(あるいは英語教育学)では、共に「英語」に関係するとは言え、専門的には異なった分野です。が、文献の探し方などは分野によらず、基本的にそう変わるものではありません。本図書館報No.24の「資料検索<経済学系編>」でもこの辺のことについては既に述べられていますが、興味のあるテーマやトピックを扱った文献が一つ見つければ、あとはその文献の巻末に載っているBibliography(参考文献目録)を見る。関係する文献がずらりとリストアップされています。参考文献目録を探索することを何度か繰り返せば、自ずと必要な文献が集められるでしょう。また、図書館内のパソコンでCD-ROMを使い、英米文学や英語学の資料を検索することもできます。『The MLA International Bibliography』はその一例です。文献目録で目星をつけた文献は、図書館の蔵書検索システム(OPAC)で探します。



「大修館英語学事典」
松浪・池上・今井／編，大修館，
1983年
分類番号：830.3/T 26/1
配架場所：開架(1階)・
参考図書コーナー

「新英語学辞典」
大塚・中島／監修，研究社，
1982年
分類番号：830.3/S 52/1
配架場所：開架(1階)・
参考図書コーナー

「現代英文法辞典」
荒木・安井／編，三省堂，
1992年
分類番号：835.03/G 16/1
配架場所：開架(1階)・
参考図書コーナー

「コンサイス英文法辞典」
安井／編，三省堂，1996年
分類番号：835.03/K 35/1
配架場所：開架(4階)・
指定図書コーナー
(西山文夫)

「チョムスキー理論辞典」
原口・中村／編，研究社，
1992年
分類番号：803.3/C 5/1
配架場所：開架(1階)・
参考図書コーナー

「例解現代英文法事典」
安井／編，大修館，1987年
分類番号：835.036/R 14/1
配架場所：開架(1階)・
参考図書コーナー

「現代英語正誤辞典」
荒木／編，研究社，1996年
分類番号：835.036/G 18/1
配架場所：開架(4階)・
指定図書コーナー
(赤羽仁志)



和書、和雑誌の場合、たいていのものは見つかります。本学図書館に無い洋雑誌は、『**学術雑誌総合目録 欧文編**』(CD-ROM版も有り)を使って、どこの図書館が所蔵しているか調べることができます。最後に、資料検索にはインターネットも大変役に立ちます。大いに利用しましょう。図書館ホームページ(<http://www.matsuyama-u.ac.jp/lib/lib.htm>)には「文献の探し方」というリンクもあり、そこで「文学資料の探し方」などの情報が得られます。また、図書館ホームページから「他の機関へのリンク」へ入っていくと、<リサーチサイト>の一つに人文・社会科学のための**アリアドネ**(<http://www.ariadne.ne.jp/>)というサイトがあります。これは資料検索に便利で、おすすめです。「英語・英米文学」と「言語学」のリンクが特に関係すると思いますが、そこからそれぞれの興味に応じたサイトを見つけることができます。

私が薦めるこの一冊

人文学部教授 増田 豊



筆者は慶応義塾大学名誉教授であり、今年1月9日、本学で「国際英語を目指そう」と題して講演をされた著名な言語学者である。

一見逆説的なタイトルから国粹主義的「英語無用論」と勘違いされそうであるが、実際には日本の英語教育が今後どのように進むべきであるかを大胆かつ示唆的に述べている。

日本人の英語力不足が最近社会問題にまでなって、「英語公用語論」まで叫ばれているが、経済大国となった日本に、外国語を公用語とする必要はない。むしろ日本語をもっと世界に通用す

英語はいらない!?

鈴木孝夫著, PHP 研究所, 2000年

分類番号: 830.4/S 133/1

配架場所: 開架(3階)

る言語として普及させることに、あらゆる手だてをつくすべきであると主張し、「言語はどのように国際語となるか」、「日本はなぜ言語的に孤立しているのか」など、歴史的な視点からも日本人の特異な言語観・外国語観に言及している。

また筆者は、英米文化をひきずった「土着英語(Native English)」と、単なる交流手段としての「イングリックEnglic」を明確に区別し、EnglishはいらないがEnglisclは、「日本人(といっても全員ではありません)にとって、何を措いても習熟する必要のある、大変に重要な技能であります。」と説いている。

さらに筆者は、確かに日本は経済大国としての地位を失い始め、日本の国際的な存在感がうすれてきているが、その原因は「日本人が英語を十分使いこなせないからではなくて、日本人そのものが人間としてだめになりだしたために、持っている英語力さえも十分に発揮できないからです。」と警鐘を鳴らしている。

法学部教授 高橋 紀夫



「とっつきにくい」とか、「わかりにくい」とか評されることの多い会社法について、初めて学ぶ者にも理解しやすいように、本書は物語風に小説仕立てになっており、手軽に、しかも多少とも臨場感を持って読み進められるように工夫されている。そこでは、登場人物とともに人間性が前面にあらわれていて、大変興味深い。

小説の舞台は、企業法務の最前線に位置する中堅の総合商社の法務部を中心にして展開され、主人公である新任の女性法務部員が遭遇する企業法務の事案について、22のストーリーに分け

小説で読む会社法

菅原貴与志著, 法学書院, 1999年

分類番号: 325.2/S 173/1

配架場所: 開架(2階)

てコンパクトにまとめられている。会社法の主要論点を縦軸に、そして、2年間にわたる法務部の歳時記的なものを横軸にして会社法の基本的な知識を習得できるように配慮されており、入門書として文字どおり「わかりやすく」かつ「おもしろく」読破できるものと思われる。

本書は会社法を学ぶための導入部分を目的としているとはいえ、学説および判例の動向についてもふれられており、また中・上級者のための演習問題も付加されており、教科書としても一定の水準を満たす内容となっている。

最後に、主人公が仕事をこなしながら、約2年半の受験勉強の結果、見事司法試験に合格し、司法修習生になるため、2年間にわたる法務部員の生活を離れて退職する筋書きについては、あくまでもフィクションの世界の話として理解すべきであろうか? 答えは、読み終えてのち、各自で判断してほしい。

新稀観書紹介<その5>

経済学部教授 北島 健一

フランス経済学稀観書から - 19世紀のフランス経済学をめぐる一つのエピソード -

現代のフランスで *économie sociale* という概念は協同組合や非営利組織などの営利を第一の目的としない民間の組織を指す言葉として用いられているが、19世紀には一つの学問分野を指す言葉としても用いられていた。レオン・ワルラスは経済学を三つの領域に分割し、その一つに *économie sociale* という名称を与えた。若干内容的には異なるとはいえシャルル・ジードもこの三分割を引き継いだ。しかし、その後の経済学は一つの領域にすぎなかった純粋経済学に特化していき、*économie sociale* の概念は忘れ去られていった。

稀観本をしげしげと眺めていて見つけた、*J.-B.-F. Marbeau, Études sur l'Économie Sociale, Paris, Imprimeurs-Unis, 1844* も一つの学問分野という意味で *économie sociale* を使っているケースの例である。古書の楽しみの一つは、頁の余白に書き込まれたメモ書きをみつけて、同じ楽しみを共有した100年以上もの昔の読者のことを想像することにある。この本にもメモ書きを見つけた。英語で *Marbeau founded the first founding hospital in France.* と書いてあるではないか。残念ながら、読者ではなく古書流通業者がこの本の価値の一つの判断基準として書いたものだろう。

しかし、とても興味深いので、同じくコレクションにあった、*Ch. Coquelin et Guillaumin(dir.), Dictionnaire de l'Économie Politique, Paris, Librairie de*

Guillaumin, 1852. で調べてみた。メモ書きは正しかった。1798年生まれのマルボは小学校の監督官などを歴任した官吏で、なによりも後に託児所と呼ばれることになった慈善施設の設立によって知られていると辞典に書いてある。他に、『所有者となった労働者による労働者の境遇を改善する手段についてのエッセイ、ないし利害の政策』という本も1834年に書いている。

当時の本によくあるこの長ったらしい名の本および彼の経歴そのものは、彼がジードとよく似た意味で *économie sociale* を使っているのではと期待させる。ワルラスもジードも *économie sociale* という研究領域を規範的な次元を導入するものとして構想したのに、ワルラスはアソシエーション(後に言う協同組合)を応用経済学の領域に含め、一方ジードは「人間が自らの境遇を改善する目的で自分たちどうして創り出す自発的な関係」の代表的組織たる協同組合を *économie sociale* に含めた。

しかし、フランスで協同組合が登場してくるのは1830年代なので、マルボの本にアソシエーションがきっちり位置づけられていると考えるのも少し無理なような気もする。案の定、ざっと見る限り、マルボは *économie sociale* を「可能なすべての幸せを国民にもたらす手段を教える」と定義していても、アソシエーションという言葉は使っていなかった。



——統計データで見る松山大学図書館——

図書館利用状況推移表

	入館者数	貸出冊数	閲覧冊数		
			開架	閉架	小計
1995年度	153,562	23,107	56,506	8,393	64,899
1996年度	180,936	27,492	60,997	10,487	71,484
1997年度	188,676	35,736	77,554	12,774	90,328
1998年度	222,733	44,273	85,839	13,416	99,255
1999年度	217,672	47,807	82,681	11,458	94,139
2000年度	220,574	49,377	73,299	12,185	85,484

『相互協力』利用件数推移表

	本学からの申込み件数			他館からの受付け件数			合計
	文献複写	相互貸借	所蔵調査	文献複写	相互貸借	所蔵調査	
1995年度	296 〔36〕	144 〔39〕	86	133 〔3〕	5 〔0〕	10	674
1996年度	380 〔53〕	226 〔59〕	107	99 〔4〕	6 〔0〕	21	839
1997年度	403 〔60〕	277 〔56〕	73	83 〔10〕	7 〔0〕	22	865
1998年度	587 〔52〕	321 〔69〕	50	124 〔15〕	12 〔0〕	20	1,114
1999年度	338 〔43〕	175 〔23〕	25	242 〔15〕	2 〔0〕	10	792
2000年度	363 〔41〕	140 〔15〕	2	451 〔35〕	39 〔8〕	9	1,004

※〔〕内は謝絶の件数
 1999年9月よりNACSIS-ILLを開始した。

「編集後記」

あらゆる言語の全ての書物を所蔵しているというボルヘスの『バベルの図書館』は、映画版『薔薇の名前』に再現された修道院の迷路のような図書館を連想させる。『薔薇の名前』のラスト・シーンでは、図書館が炎上し夥しい書物が焼失され、図書館員にとってまことに痛ましい光景であった。

この3月12日の芸予地震によって、本学図書館も大量の図書が、書架から落下・散乱するという被害を受けた。阪神・淡路大震災の教訓から、書架を固定していたので、書物の落下のみで、他に大きな被害はなかったものの、自然災害の怖さを改めて思い知らされた。『薔薇の名前』のような火災は、図書館にとって災難というような言葉では済まされないものがある。図書資料の保存や、災害

時の安全のために、危機管理の徹底化を図ることが私達の責務である。

ボルヘスが記した「図書館は永遠をこえて存在する」という言葉は、<知の宝庫>としての図書館の存在意義を再認識させる。そのためにも、創立以来営々と蓄積された蔵書の全データの遡及入力が昨年度ほぼ完了されたいま、利用者への有効な活用を図りたい。

今号の冒頭には、80年代以降本学図書館の進展の様子を、運営委員の大内先生に執筆していただいた。数字をもとに客観的な評価を頂くと、更なる利用者サービス向上に努めなければならないと、私達館員は身の引き締まる思いがする。利用者のために<図書館を編集する>という新たな課題が与えられたと考えたい。

松山大学図書館報 No.27 2001年5月1日発行

編集・発行 松山大学図書館

〒790-8578 松山市文京町4番地2 TEL(089)925-7111(代)

ホームページアドレス <http://www.matsuyama-u.ac.jp>

E-mail:w-lib@cc.matsuyama-u.ac.jp